

毎年恒例の「クラフト体験教室」を開催！

元気いっぱい子どもたち、両日あわせて60人の参加がありました。

11/19「真珠を作る貝 あこや貝で手作り体験♪」

伊勢志摩国立公園自然ふれあい推進協議会 一ノ瀬登志雄さんのレクチャーで、螺鈿細工®のタイルクラフト体験を行いました。

※螺鈿とは、貝片を器物等の木地や漆面に装着して施す装飾法のこと。



伊勢志摩で採れたさまざまな形や色の貝たち

あこや貝で魚の形を作ったよ！

子どもから大人まで楽しめました

11/20「石のお絵描き」

鳥羽市の中学校で美術講師をつとめる上村ひかるさんの指導のもと、子どもたち12人が想像を広げ、思い思いに石に絵を描き楽しみました。



伊勢志摩国立公園内9か所の浜辺や河原で集めた石がズラリ！

この石は何に見えるかな？想像が膨らみます。

一生懸命お絵描き中...

ステキな作品がたくさん完成！

TOPICS

「国立公園の新観光資源開発事業」で6つのコンテンツを造成！

伊勢志摩国立公園の保護と活用に向けて、水産資源や海洋ごみなどの新しい自然資源を活用したサステナブル（持続可能）な観光体験をご紹介します。

6つの体験プラン

- 1 鯛になる、いのちをいただく塩釜焼き体験（友栄水産）
- 2 市場見学&答志島ビンゴゲーム（島の旅社推進協議会）
- 3 伊勢志摩のお魚を知る カヤックフィッシング体験（サニーコーストカヤックス）
- 4 漂着ごみから考える SDGs（海島遊民くらぶ）
- 5 海の環境に想いをよせるフォトフレーム作り（志摩自然学校）
- 6 漂着ごみ収集活動&シェルキャンドル作り（島の旅社推進協議会）



鯛の塩釜焼き体験



貝殻や海藻プラスチックごみを使ったフォトフレーム

お知らせ

第6回石原円吉賞 2023年7月に受賞候補者の推薦を募集します！

石原円吉賞は例年7月ごろ募集を開始し、伊勢志摩国立公園の指定日（11月20日）にあわせて表彰式を行います。伊勢志摩国立公園の最大の魅力は、人と自然の関わりを感じられるところで、今後も同国立公園の保全や活用に取り組み、魅力ある地域づくりを行っている方々の活動にスポットを当てていきます。推薦の受付期間や表彰式の日程については、詳細が決まり次第、ご案内いたします。皆さまの推薦をお待ちしています。

〈候補者の推薦について〉

候補者は、本人以外からの推薦により募集します。国立公園指定に奔走した石原円吉翁のように、伊勢志摩国立公園の自然や文化を守る取組（地域文化の継承や適正な活用の推進、動植物の保全活動など）に携わっている個人・団体（若干名）が対象となります。推薦書は、伊勢志摩国立公園協会のホームページから入手できます。必要事項を記入のうえ、メール ise-shima@ise-shima.or.jp に送信してください。

このチラシに関する問い合わせ先

（一財）伊勢志摩国立公園協会
〒517-0011 三重県鳥羽市鳥羽1丁目2383-51
TEL & FAX 0599-25-2358
ホームページ <https://www.ise-shima.or.jp/>
メール ise-shima@ise-shima.or.jp



ホームページ



メール

※新型コロナウイルス感染症の拡大状況等により、イベントが変更となる場合があります。お出掛け前にあらためてご確認ください。

11月20日は伊勢志摩国立公園の誕生日

世界水準のナショナルパークを目指す

伊勢志摩国立公園

初春の便り



Semi-Annual
Vol.10

発行／（一財）伊勢志摩国立公園協会、三重県 編集協力／（株）アイブレーション

第5回 石原円吉賞にアマチュア映像作家の奥野拓也さん輝く！

伊勢志摩国立公園の誕生日をお祝いするイベント“Happy Birthday！伊勢志摩国立公園”が、11月18日～20日に、鳥羽マリンターミナルで開催されました。このイベントで行われた石原円吉賞表彰式と記念講演、記念イベントの様子を紹介します。

伊勢志摩の自然や風土、歴史文化の映像を記録・発信

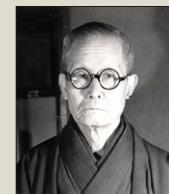
今年度で5回目となる石原円吉賞は、奥野拓也さん（伊勢市大湊町）が選ばれました。表彰式には、関係者や中村欣一郎鳥羽市長ほか来賓約40人が出席し、三重大学大学院生物資源学研究所松田浩一教授による記念講演もありました。奥野さんには、伊勢志摩国立公園協会 山本教和会長から表彰状と桜の木で作った記念品の置き時計が授与され、会場は温かい拍手に包まれました。



表彰式の様子

この賞は、戦後初の国立公園指定の実現に力を尽くした志摩市出身の政治家 石原円吉（1877年～1973年）の志を継承し、同国立公園の地域文化の継承、適正な活用、動植物の保護、美化などに貢献した個人や団体を表彰するものです。

今回は、表彰式と記念講演が初日に行われ、2日目と3日目には一般参加者が楽しめるクラフト体験などの記念イベントが開催されました。



石原円吉 いしはら・えんきち（1877～1973）

三重県英虞郡和具村（現在の志摩市志摩町和具）出身。実業家で国や県の政界でも活躍。水産業発展と海の保全に尽力した。戦前から伊勢志摩の国立公園の指定にも貢献し、戦後、伊勢志摩国立公園協会初代会長に就任。昭和46年海の博物館を開設した。

選考委員による評価・コメント



皇學館大学名誉教授 桜井 治男 さん

本年度は6団体・2個人を審査いたしました。奥野さんは中学校の教員を退職後、映像作家として新たな道を歩まれました。私たちは、目の前の風景を当たり前と思い、いろいろな事に気づけにくかったりします。ですが、地球科学的な視点で見ると大変貴重なもので、そこに着目された奥野さんは、大湊町をはじめ伊勢志摩国立公園の歴史や地形地質・生き物など、この地域の自然の重要性を形成してきた基盤をしっかりと映像に残してきました。後世に伝えるために発信されてきた取組に私たちも注目し、選定をさせていただきました。

地域の魅力を再発見できる映像を制作していきたい

このような賞をいただき、驚きと感謝の気持ちでいっぱいです。
現在は、身近な自然観察を楽しんでいます。たとえば、見慣れた草花にも見過ごしているところがたくさんあります。「見ているけれども、見えていない」植物の微細なところを接写し、あっと目を見張るような映像を見てもらえるようにしていきたいです。
豊かな自然体験をしてきた子は、大きくなったら自然を大切に作る大人に育つと、私は信じています。
そのためにも、子どもたちが自然に目を向けるきっかけとなる映像作品を創っていききたいですね。



受賞者プロフィール

奥野 拓也 さん（伊勢市大湊町在住）
教員退職後、伊勢志摩を中心に地域文化の継承や自然ガイドなどのボランティア活動に取り組む。
なかでも地元大湊町においては、自治会の要請によって、大量の古文書のデジタル化や地域の紹介冊子「わが町大湊」の編纂に携わるなど、地元の自然や歴史を地域内外に向けて発信している。

こんな活動をしています！

竜ヶ峠エコツアー登山道整備



伊勢古道巡りを通して、落人伝説が残る「平家の里」の魅力発信に取組む「竜ヶ峠を守る会」に所属。エコツアー講師や登山道整備を行っています。

自然観察・調査記録



これは、大湊川のプランクトンを1年間にわたり調べていたところの一コマです。現在は、主に植物の生態や精細な観察が中心です。

展望案内看板原案制作



大湊は海拔の低いデルタですが、360度の美しいパノラマが広がっています。これは皆さんに知ってほしい町の大きな宝です。

映像コンテスト授賞式



東京ビデオフェスティバル(TVF)で大林彦氏から講評を、小林はくどう氏からは表彰状を受けました。入賞作品「大湊のおもしろプランクトン」

最下流の宮川流域案内人



今はコロナ禍ということで、映像を発信という形で活動しています。上の写真は、大湊海岸河口部から見える南アルプスと大型船です。

「宮川流域案内人」とは？

宮川流域の自然や歴史、伝統的な暮らしなどを地域の人や訪れた人に対して、誰にでもわかりやすく伝えることができる案内人です。

映像作品



一字郷に関する歴史・自然・生活



五ヶ所～伊勢神宮(内宮)の古道紹介

奥野拓也さんの過去に入賞した伊勢志摩関係の映像作品

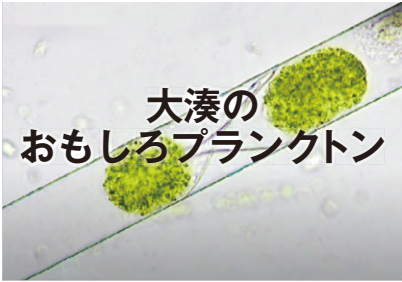
TVF2016 月間セレクト



GPSの時代を迎え、灯台の影が薄くなりつつありますが、志摩半島沿岸には温かみのある灯台がいくつもあります。



TVF2018 アワード



1年以上にわたり、毎日観察記録をした大湊川のプランクトンを厳選して映像化。孫との掛け合いのナレーションも必見です！



県アマチュア映像連盟コン 2009GP



フィリピン海プレートの潜り込みにより生じた付加体が志摩半島南部の沿岸各地で見られ、大地の動きが生々しく感じられます。



第5回 石原円吉賞 記念講演

「伊勢志摩における藻場の現状と漁業生産について」

講師：三重大学大学院 生物資源学科研究科 教授 **松田 浩一 さん**



知られざる海底の環境危機

三重大学水産実験所は、昨年4月に志摩市から鳥羽市小浜町に移転しました。志摩半島という、海がきれいな癒しの絶景スポットと言われますが、実はこの地域の海面下では、陸上からはうかがい知れないような「藻場*衰退」という危機的現象が起こっています。
この現状に、海洋生物を研究している私たちとしても「何か出来ないか」と、昨年5月に地域の水産研究機関や県・市が参画する「三重県藻場研究会」を設立し、藻場の状況について独自の対策や潜水調査を始めました。
※藻場…海藻が茂る場所のこと。

生き物の生活を支える「藻場」

藻場にもいろいろな種類があり、内湾にあるアマモ群落の「アマモ場」、内湾から外洋にあるホンダワラ類の多い「ガラモ場」、コンブ科の海藻であるアラメや

カジメが生える外洋に面した「海中林」というように、それぞれの環境に適した藻場が形成されています。
志摩市の波切沖の水深5～7mの海底は、現状では短いホンダワラがまばらに生える場所となっていますが、かつては海中林に覆われ、アワビやサザエ、パテイラ(磯もの)、アカナマコ、イセエビなどが豊かに生息していました。しかし、餌や隠れ場所となっていたアラメなどの海藻が一挙になくなり、2年ほど前から生き物が急激に減少しています。一方、波切から北へ数kmしか離れていない安乗沖の水深2～6mの海底では、海中林を形成するアラメやカジメが豊富に繁っています。このように、わずかな場所の違いで海藻類の繁茂状況に大きな違いが見られています。

気候変動で進む“海の温暖化”

考えられる要因の一つとして挙げられるのが、長年続く「黒潮大蛇行」の影響の違いです。黒潮が大蛇行すると志摩半島沿岸の水温は高温化しますが、波切沖では黒潮に近い分、安乗沖より影響が強くなります。その結果、冬季の水温は安乗沖より波切沖の方が1℃高くなっています。海水は空気よりも比熱が4倍ほど高く、海中での1℃の違いは、海ですごす生き物にとって4℃ほど違うことになります。アラメやカジメは低水

温条件を好むため、1℃の差は大きく、これが海藻の有無に関係するのではないかと考えています。また、ブダイやアイゴなど海藻を食べる南方系の魚が志摩半島沿岸に増え、海藻を食べ尽くしてしまっていることも深刻な問題です。

大切な藻場を守るために

伊勢志摩地域では、高級魚メチダイや沖縄県魚のグルグン、カタボシイワシなど、かつては獲れなかった南方系の魚の漁獲量が増加しています。漁業支援のために、消費者の皆さんにはこれまで地域では馴染みが薄かった魚に親しんでもらうことも大切だと考えています。
豊かな自然が広がる伊勢志摩国立公園の環境保全に向けて、研究会では引き続き、水中・空中ドローンなど最新技術を使ったモニタリング調査を行い、伊勢志摩の藻場をいかに守り、再生していくかについて共同研究を進めていきます。

